



音楽に託された未来

—東京音楽学校のアーカイブズ資料より—

2021年10月2日(土)

14:00開演 (13:15開場)

第6ホール(東京芸術大学音楽学部内)



第一幕 第一幕
* 111 * 不機嫌に嵐中夜 総合百 総合百 甲の森の暗小 \ あり

第1部 戦前期の東京音楽学校

◆西洋音楽黎明期◆

- 1 ディットリヒ（伊澤修二作歌）《憲法発布之頌》…………… 混声四部合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)
- 2 瀧廉太郎（東くめ作歌）《四季の瀧》…………… 頓所里樹(Ten.)、辻井夏暉(Bar.)、筒井紀貴(Pf.)

◆東京音楽学校教員による作歌◆

- 3 ヘンデル（鳥居枕作歌）《神武東征》（原曲《ハレルヤ》）…………… 混声四部合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)
- 4 ベートーヴェン（武島羽衣作歌）《菊の盃》…………… 無伴奏混声四部合唱、谷本喜基(Cond.)
- 5 グルック（石倉小三郎・乙骨三郎・吉田豊吉・近藤逸五郎訳詞）《オルフォイス》より
…………… オルフォイス(野間愛)、混声四部合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)

◆東京音楽学校と海軍軍楽隊◆

- 6 吉本光蔵《東京湾凱旋観艦式記念行進曲》／二台ピアノ編曲版（松岡あさひ編曲）…………… 松岡あさひ、筒井紀貴(Pf.)

◆東京音楽学校謹製～国策に沿った音楽◆

- 7 鳥崎赤太郎（吉丸一昌作歌）《獨逸鷹懲の歌》…………… 男声合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)
- 8 信時潔（手塚義明作歌）《我等は太陽民族》…………… 男声合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)
- 9 下總覺三（川路柳虹作歌〔東京音楽学校編〕）《生きよ、國民 - 結核豫防の歌 -》
…………… 女声合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)
- 10 相浦清子／下總皖一（土井晚翠作歌）《日獨伊防共の歌》…………… 無伴奏混声四部合唱、谷本喜基(Cond.)

第2部 戦中期の東京音楽学校

◆戦没学生たちの作品◆

- 11 鬼頭恭一 無題（アレグレット イ短調）…………… 筒井紀貴(Pf.)
- 12 草川宏（島崎藤村詩）《秋に隠れて》…………… 関口直仁(Bar.)、松岡あさひ(Pf.)
- 13 葛原守 無題（かなしひものよ）…………… 岡うらら(Sop.)、筒井紀貴(Pf.)
- 14 村野弘二（島崎藤村詩）《小兎のうた》…………… 野間愛(Alt.)、松岡あさひ(Pf.)
- 15 戸田盛忠（三木露風詩）《ふるさとの》…………… 瀬戸優貴子(Mezzo Sop.)、松岡あさひ(Pf.)

◆戦争で命を落とした先生たち◆

- 16 鈴木正三（杉田好夫詩）《春夏秋冬》…………… 瀧本真己(Sop.)、市川泰明(Ten.)、松岡あさひ(Pf.)
- 17 岡田二郎（北原白秋詩）《泉石》…………… 瀧本真己(Sop.)、関口直仁(Bar.)、松岡あさひ(Pf.)
- 18 東風平恵位（太田博詩）《別れの曲》（松岡あさひ編曲）…………… 混声四部合唱、横山希(Pf.)、谷本喜基(Cond.)

◆エピローグ◆

- 19 柏木俊夫（那珂秀穂訳詩）《支那歴朝閨秀詩抄》より
1. ほろほると（原詩：劉妙容） 5.十五夜（原詩：崔鶯鶯） 11.鐘（原詩：席風蘭）…………… 寺島弘城(Ten.)、筒井紀貴(Pf.)

※本プログラムの最後に全ての歌詞情報を掲載しています。

表紙の写真：左上：《憲法発布之頌》ディットリヒ自筆・冒頭（東京藝術大学附属図書館所蔵）、左下：『歌劇オルフォイス演奏記念 明治卅六年七月廿三日』より《オルフォイス》第一幕第一齣（大島正規様、大島妙子様ご寄贈）、右上：明治23年新築の東京音楽学校校舎、右中央：吉本光蔵《東京湾凱旋観艦式記念行進曲》ピアノ編曲版表紙（菊池武篤様ご寄贈）、柏木俊夫《支那歴朝閨秀詩抄》自筆表紙（柏木成豪様ご寄贈）

ご挨拶



©新津保 建秀

本日は「音楽に託された未来～東京音楽学校のアーカイブズ史料より～」にご来場いただき誠に有難うございます。明治20年（1887年）の東京音楽学校開校間もない頃、お雇い外国人としてオーストリアから招聘されたルドルフ・ディットリヒが初代校長の伊澤修二とともに大日本帝国憲法発布を記念して作曲した合唱曲で幕が開きます。我が国における西洋音楽黎明期には、国民の音楽教育の教材としてクラシック名曲や外国の民謡のメロディーに音楽学校の教員が日本語の歌詞を宛てる作歌が主流となりました。現在の杉本和寛音楽学部長も文学者でいらっしゃいますが、これまでも大岡信氏や林望氏といった著名な文学者が音楽学部教授として在籍されていたことは、東京音楽学校以来の伝統のようです。その後、明治後期からは、小中学校の教科書に載る唱歌が、作詞・作曲ともに主に東京音楽学校の教員や学生によって作られるようになります。

本公演第1部後半では、日本の帝国主義時代の国策に沿った東京音楽学校の役割がクローズアップされます。第2部では2017年から音楽学部大学史史料室と演奏芸術センターの協力により毎夏、続けて来た「戦没学生のメッセージ」の一連のシリーズの流れで、戦争の犠牲となった学生や教員の作品に光が当てられます。戦争に翻弄されながらもより良き未来への希望を曲に託した当時の人々に思いを馳せ、この企画の基本理念でもあるSDGs（持続可能な開発目標）の意義をご一緒に考えたいものです。

東京藝術大学長 澤 和樹

大学史史料室の譜面の価値



今回、大学史史料室に保存されている明治期から昭和20年代までの珍しい譜面が、日の目を見る貴重な機会が実現しました。譜面が「日の目を見る」というのは、「展示される」ということではなく「演奏される」ということです。

東京藝術大学大学史史料室には、藝大の前身である東京音楽学校の時代から営々と築き上げられてきた活動の貴重な史料が所蔵されています。それらの多くは学内に蓄積された文書類・写真などですが、中には教職員・卒業生・関係者らから寄贈された資料もあります。そしてそこには、歴史的価値のある多くの譜面も含まれています。ここで言う「歴史的価値」というのは、単に古いというだけではなく、その曲の成立事情を知ることが、当時の社会状況の理解につながるという意味です。

史料というものは一部の研究者だけではなく、広く一般の方々に利用されることでその価値が一層高まります。特に再現芸術である音楽の場合、どんなに貴重な譜面も大事に保存されているだけでは、その価値を十全に発揮しているとは言えないのではないのでしょうか。本日の演奏曲の中には、作曲当時以来久しく忘れ去られていた曲も数多く、その意味でも大変興味深いプログラムです。

ただし、史料の歴史的価値と音楽的価値は、また別だということも忘れてはなりません。今日はそれを自分の耳で確かめることのできる絶好の機会でもあります。

東京藝術大学名誉教授 大石 泰

音楽に託された未来～東京音楽学校のアーカイブズ史料より～ 企画趣旨と演奏曲目について



東京藝術大学音楽学部大学史史料室非常勤講師 橋本 久美子

本日は東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト 2021「音楽に託された未来～東京音楽学校のアーカイブズ史料より」にご来場賜り、誠にありがとうございます。音楽学部大学史史料室は音楽取調掛、東京音楽学校の歴史を伝える多様な史料を所蔵しています。学校側史料と寄贈史料に大別されますが、いずれにも楽譜が含まれます。全国の大学アーカイブズが文書記録中心に構成されるなかで、類まれなアーカイブズを形成しています。楽譜には東京音楽学校が国や社会との関わりから生まれた公的な曲から、戦没学生や教員の個人的な曲まで多様です。それらの中から今回のI LOVE YOU プロジェクトのテーマ SDGs(持続可能な開発計画目標)を基本理念に選曲・構成したのが今回のコンサートです。コンサートを通じて、音楽はいかに人々や社会を動かす原動力であり得るかを考え、人間が人間らしく生きることのできる世界を音楽に探ります。人は作曲し、演奏し、聴くとき、いかに困難な時代でも、音楽に持続可能な未来への希望を託してきたのではないのでしょうか。このコンサートは、歴史史料である楽譜を音楽として蘇らせ、演奏を収録し、音源を後世に伝えていくという、アーカイブズの活動の一環です。コンサートそれ自体が、SDGs(持続可能な開発目標)の実践なのです。

選曲と SDGs について

第一部前半は明治時代の東京音楽学校の開校間もない頃の音楽で始まります。

《**憲法発布之頌**》は大日本帝国憲法が発布された時の記念歌です。東京音楽学校が開校して間もない明治 22 年のこと。初代校長の伊澤修二が作詞し、明治 20 年代の東京音楽学校で作曲やヴァイオリンを教えたオーストリア人、ディトリヒが作曲しました。日本の未来を託す憲法発布を祝う歌は外国人によって作曲されました。作詞者、作曲者が音楽に託したより良い未来とは一一。当時 SDGs の概念はなかったものの、憲法制定は国全体の持続可能な開発目標の前提となるものです。日本が国を挙げて西洋音楽に入門し、小学校から男女のクラスが別れていた時代に、外国人の作曲による男女混声合唱曲で祝ったことは、当時としては先進的な出来事だったことでしょう。その歌が一般国民（当時の言い方では臣民）に浸透し歌い継がれることはありませんでしたが、SDGs「教育 4.7」「ジェンダー平等 5.5」「パートナーシップ 17.16」にもつながる未来がそこには託されていたのではないのでしょうか。

大学史史料室に寄贈された東くめ史料の中に《**四季の瀧**》の旋律と歌詞を書いた譜面がありました。くめの自筆と見られます。史料の寄贈には、史料が永く後世に伝えられ生かされるようにとの寄贈者の願いが託されています。瀧廉太郎が作曲に託した未来がくめ史料に残され、瀧との思い出も記した史料が母校に託され、今回の選曲となりました。122 年前の《四季の瀧》に託された「未来」とは、じつは今なのかもしれません。《四季の瀧》(1899)に詠まれた春夏秋冬は、現代の日本ではどうなっているのでしょうか。《四季の瀧》は、現代社会における海や陸の生態系、資源の持続可能な開発(「気候変動 13.1」「海 14.1、14.7」「陸 15.1」)への気付きを与えているようにも思われます。

西洋音楽の歌詞が日本文化の脈絡で新たに創作された作歌の例。《**神武東征**》は、日本建国史をハレルヤコーラスに乗せて謳います。《**菊の盃**》は明治期の学生史料が寄贈され写譜が見つかったのがきっかけです。ベートーヴェンの春を讃える混声合唱曲《*O Welt, du bist so schön*》で日本の秋を歌います。

《**オルフォイス**》は卒業間近の三浦環（当時は柴田）が出演した歴史的演奏会の曲目です。当時の歌詞が書き込まれた楽譜が寄贈され、今回の演奏につながりました。“男女七歳にして席を同じうせず”（『礼記』内則）とされた明治時代に、官立専門学校の男女生徒が一つの舞台上でオペラを演じたことは当時としては突破りでした。オルフォイス役もアルトが演じ、主役は3名とも女子でしたが、混声合唱もありました。その後、戦後に藝大オペラが始まるまで東京音楽学校でオペラが上演されることはありませんでした。開校当時から男女共学でしたから、学則も種々定められていましたが、学生たちには「教育 4.7」の「文化の持続可能な開発への貢献」への意識もあったことでしょう。明治 30 年代の《オルフォイス》に東京音楽学校の旺盛な開拓精神を想起したいと思います。

《**東京湾凱旋観艦式記念行進曲**》は《オルフォイス》上演の 2 年後の作品。作曲した吉本は日露戦争時の海軍軍楽隊長でした。吉本自身によるピアノ編曲版がご親族より寄贈され、今回それをさらにピアノ 2 台に編曲し演奏します。音楽が軍の士気を高め、国の持続可能性にも貢献したこと、音楽が人々や社会を動かす原動力となったことは間違い

ないでしょう。今回のコンサートを通じて、音楽がSDGsの原動力となる可能性を探ってみましょう。

第一部後半は、時代背景との結びつきが強く、東京音楽学校の教員や生徒が作詞や作曲に関わった曲です。

《獨逸膺懲の歌》という曲が大正3年10月17日、18日両日の学友会恤兵演奏会で演奏されました。この曲については当時、獨逸を膺懲する原曲がドイツ人シュルツ Johann Abraham Schulz の作曲であることを皮肉った批評が書かれました。調査したところ、原曲は *Am Sylvester-Abend* (大晦日の意) と判明しましたが、吉丸の作歌を確認するには至らず、作歌を書き込んだ譜面も見つかりません。しかし楽譜を探すうちに、吉丸一昌作歌、島崎赤太郎作曲《獨逸膺懲の歌》の出版譜が確認されました。旋律は別で、作歌も同一ではないかもしれませんが、作歌者とタイトルが同じであることから、両者は趣旨を同じくし、共通の文言もあると推測され、この曲を演奏することにしました。敵国を膺懲(膺懲：征伐しこらしめる)する意図で歌うことは、書く、語るのとどのように違うのか、一考に値するでしょう。《我等は太陽民族》は震災後の社会的混乱を沈静化する趣旨、《生きよ國民》は、まだ抗生物質が実用化されていない時代の感染症との闘いです。作曲された85年前と今とは人々の生活に隔世の感がありますが、コロナ下の今、当時の状況を押し量ることもできるのではないのでしょうか(「健康と福祉3.3、3.d」)。歌は感染症を予防・治療することはできませんが、人々に呼びかけ、励まし、行動を促すことはできましょう。ただし今は歌うこと自体が難題なのですが。《日獨伊防共の歌》は獨逸膺懲の23年後、敵国だったドイツが同盟国となったのを機に生まれました。東京音楽学校が国策や社会背景の中で送り出した音楽を実際に聴いてみましょう。以上4曲はSDGs「不平等をなくそう10.2、10.3」「パートナーシップ17.1、17.5、17.16」等との関係が考えられます。人や国の不平等が是正されず、パートナーシップの活性化がなければ国際間の平和は保たれません。

第二部は、戦没学生5名の作品で始まります。このうち鬼頭恭一の《無題 [アレグレット]》のみが海軍入団後、訓練の合間に書かれたものです。訓練続きの軍隊生活にあって、譜面に向かう時だけは自分の構想力を発揮することができたのでしょう。明日の命がわからなくても、鬼頭は音楽に自分を託し、何か救われるところがあったのでしょうか。その何かとは、SDGsの特定の目標には適合しにくいですが、全ての目標の根底にあって人に活力を与える原動力ではないのでしょうか。草川宏、葛原守、村野弘二、戸田盛忠の作品は全て入隊前のものです。音楽学校入学前の村野の《小兎のうた》には純粋に音楽表現を追求する姿が映り、葛原守の《かなしひものよ》には兄を奪った戦争の影を思わせ、草川宏の《秋に隠れて》はひたむきに作曲を学んだ様子が窺われます。戸田盛忠の《ふるさと》は出版譜から見つかった意欲作です。早世した彼らも、作曲するときは未来があることを信じ、自身の音楽を受け取ってくれる誰かに託そうとしたのではないのでしょうか。音楽は自己表現であると同時に、人と人、人と宇宙をつなぐ力があり、他者との一体感を醸し出す。それこそが彼らを突き動かした音楽の原動力ではないのでしょうか。

戦争は教師の命をも奪いました。ヴァイオリニストの岡田二郎の《泉石》は昭和12年の作品で、教科書編集のため依頼されたもの。鈴木正三は戦地から妻に《春夏秋冬》を、東風平恵位は《別れの曲》を教え子のひめゆり学徒隊に贈りました。鈴木は妻の、東風平は教え子の歌声を念頭に置いて作曲したことでしょう。彼らは自分が生き延びることは難しいと知りながら、大切な人に歌を託し、生きてほしいと願ったのです。穏やかな日常のため、SDGsの身近な問題としては「住み続けられるまち11.2、11.5」、大規模には「パートナーシップ12.16」が欠かせません。

日中が戦争状態にあった昭和19年、東京音楽学校卒業生の柏木俊夫は、中国の女流詩人の詩集に「日華親善の一助ともなれば作曲者の喜びに過ぎたるはない」と歌曲集《支那歴朝閨秀詩抄》を作曲しました。恋しい人を想う詩がほとんどです。地球上の至る所で人々は愛と平和を希求し、親善を望んでいます。音楽はそれ自体が目に見える形でSDGsを推進することはなくても、その発想や実践を推進する原動力となる可能性を持っているのではないのでしょうか。このコンサートがかつて音楽に託された未来を受け取り、新たに音楽に未来を託す場となれば幸いです。

展示

ホワイエにて「音楽に託された未来」のコンサートに関連する展示を行います。《オルフォイス》の日本語歌詞の書き込まれた楽譜、吉本光蔵の自筆楽譜、吉本撮影による日露戦争写真、《生きよ國民》に関連する「結核予防ニ関スル令旨」(巻物・大学史料室所蔵)、東くめ自筆の放送原稿、『支那歴朝閨秀詩抄』自筆譜など。中華民国江蘇省で戦病死された教員・鈴木正三氏の写譜・フルート・写真は、コンサートの1週間前、70有余年の眠りから目を覚まし、生前に会うことのなかったお嬢様と孫娘を走らせ母校に飛び込んできたものです。ぜひご覧ください。

ご寄贈・ご協力いただいた方々

本企画はI LOVE YOU プロジェクト2021により実施されます。本学のコンサートでも演奏の機会を作りにくい作品が含まれますが、いずれも東京音楽学校の歴史を伝える重要な作品です。その音源と史料をアーカイブズとして後世に継承して参ります。コンサートの企画・開催には演奏藝術センター、アーカイブ化には音響研究室、芸術情報センター、担当事務部署のご協力をいただきました。ご支援ご協力いただきました皆様に御礼申し上げます。

今回の演奏に関わる史料のご寄贈、また情報提供などご協力をいただいた方々のお名前を記し御礼申し上げます。

菊池武篤様(吉本光蔵史料)、東紘一郎様(東くめ史料)、吉川道子様(上野ひさ・田中ろく史料)、佐藤明子様(鬼頭恭一史料)、草川誠様・郁様(草川宏史料)、葛原安子様・眞様(葛原守史料)、中林敦子様(村野弘二史料)、鈴木和美様(戸田盛忠史料)、日高三美子様・日高純様(鈴木正三史料)、岡田晋輔様(岡田二郎史料)、武富文子様・富士川正美様(東風平恵位史料)、柏木成豪様(柏木俊夫史料)。

藝大の未来を創るアーカイブズ～大学史史料室 ——歴史の記録・伝承と新たな芸術創造—— ——歴史はこのこされているか、歴史を刻み、未来を創る——



東京藝術大学芸術情報センター助教 嘉村 哲郎

大学史史料室とのお付き合いは、開室して間もない2009～2010年頃、ネットワークのトラブル対応で大学史史料室（当初は学史編纂室）を訪ねたのが始まりでした。以後、デジタルアーカイブ、コンテンツ作成、ホームページ開設など行ってきました。「音楽に託された未来～東京音楽学校のアーカイブズ史料より」の企画に寄せ、当方が考える大学史史料室の課題などを記します。

① 大学史史料室のウェブサイトについて（2017年4月1日開設）

現在のウェブサイトは、情報が見られるという点では良いのですが、データが使えるという観点では整っていません。そのため、資料メタデータのデータベースや画像メタデータの整備が必要です。これにより、単に情報が見られるのではなく、情報がデータで使えるという環境が整います。

多言語化も課題ですが、最近では機械翻訳もだいぶよくなってきています。今後は英語のみならず数十カ国語に対応した自動翻訳を使つてのサイト公開も検討する時期でしょう。

参考: <https://amc.geidai.ac.jp/ict/> 右下の[Select Languages]各国語に自動翻訳される。

② ウェブサイトに開設した「戦時音楽学生 Web アーカイブズ〈声聴館〉」について（2019年4月1日開設）

当方が〈声聴館〉に対して抱いたイメージでサイトデザインしましたが、構築期間も短かったこともあり、個人的には満足していない部分があります。今後の事を考えると〈声聴館〉専用のサイトとして独立させた方がいいでしょう。また、歴史を語るという視点で、関係者へのインタビューなど、オーラルヒストリーのような歴史に関係あるコンテンツや関連する外部リンクがあってもいいと感じています。

③ 学会発表の事例など

大学史史料室で公開したデータを事例に、国内外のアーカイブ関連学会で報告やデモンストレーションを行いました。データを誰でも自由に利用できるよう、多様な情報を包括的に提供するデータの構造化やデータベースに関する研究です。最近の事例を紹介します。

▶ 2018年9月 国際博物館会議国際ドキュメンテーション委員会: ギリシャ・クレタ島

「CIDOC2018 Workshop, Make your museum more visible with Wikimedia projects」

<http://www.cidoc2018.com/workshop/Make%20your%20museum%20more%20visible%20with%20Wikimedia%20projects>

利用データ: 吉本光蔵撮影写真データ、英語メタデータ

OpenGLAMの活動の一つとして、WIKIPEDIAにあった吉本光蔵のページと大学史史料室の撮影写真の英語版データを関連付けるために、画像データとメタデータを WIKIMEDIA COMMONS にアップロードし、作者情報及び所蔵元情報を関連付けて公開した。

▶2020年4月デジタルアーカイブ学会

「Wikimedia Commons を利用したデジタルアーカイブ公開の試み」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsda/4/2/4_150/_article/-char/ja/

利用データ：吉本光蔵撮影写真日本語版データ、外国人教師関係書類画像データ
情報システムのメンテナンスや物理機器コストやデータ保存と公開にかかる属人的要素の問題を解決するために、オープンライセンスでデータを Web 公開・共有を可能とする Wikimedia Commons ならびに Wikidata の利用を試みた。本発表では、Wikimedia Commons と Wiki Data を使用したデータ公開と構造化データ化の方法などの取組を報告した。

▶2021年6月 ジャパン・オープンサイエンスサミット(国立国会図書館 主催)

「東京藝術大学 音楽学部大学史史料室のデジタルアーカイブ公開と GLAM Wiki」

<https://lab.ndl.go.jp/event/joss2021/>

利用データ：山田耕筰 若き日の狂詩曲

国立国会図書館歴史的音源データ、大学史史料室、ミュージックアーカイブのそれぞれに共通する山田耕筰関係のデータを、関連情報の検索やデータとして利用できるように Wikidata に登録するデモンストレーションを行った。

④ 大学史史料室の役割と位置

過去にあったできごとを調べ、学び、そこから新たな発見や知識を生かす、“温故知新”という言葉がありますが、史料とはまさにそうあるべきもので、史料室が持つ史料は、東京藝術大学の過去を知ることのできる重要な情報源であり、藝大の未来を創るための材料といえるでしょう。

一方、史料の扱いを軽視するという事は、その組織にとって未来はないともいえます。また、史料はそれらが自然と集まってきて、勝手に使えるようになるものではなく、歴史を綴る人、それらを編纂して管理する人びとの苦労があってこそ存在できるものです。

世界に数多くのつながりがある東京藝術大学では、大学という組織に留まらず、その時代の芸術や社会に一役を担っている。こうしている間にも、日々の芸術活動は行われていますが、果たして歴史を刻むという観点から、記録はのこされているのだろうか、と心配になることがあります。東京藝術大学は、毎日あらたな歴史をつくっているのだと言うことを、組織自身をもっと自覚し、歴史を刻むための活動をより注力して頂きたいという思いがあります。

このような環境の中にある大学史史料室は、東京藝術大学、ひいては日本の芸術の歴史を記録し伝えていくと同時に、新たな芸術を創造可能にするという、大変重要な役割を担う組織のひとつと考えています。

1. 《憲法発布之頌》伊澤修二（作歌）／ルドルフ・ディットリヒ（作曲）

“Kenpouhappunoshou” Shuji Izawa (Lyrics)/Rudolf Dittrich (Composer)



(左から) 伊澤修二、ディットリヒ

明治 22 (1889) 年 2 月 11 日、完成したばかりの明治宮殿正殿において、大日本帝国憲法発布式が執り行われた。その折に作られた《憲法発布之頌》は『中等唱歌集』(東京音楽学校、1889 年発行) 44~49 頁に掲載されている。また、東京藝術大学附属図書館所蔵資料に《憲法発布之頌》の自筆譜(ピアノ伴奏付き)や歌詞(ローマ字と B.H. チェンバレンによる英訳)が記された印刷物もある。

本作品は、音楽取調掛初代校長・伊澤修二による詞に外国人教師のルドルフ・ディットリヒが曲をつけた声楽曲である。R. ディットリヒは明治 21~27 (1888~1894) 年に東京音楽学校でオルガン、ヴァイオリン、ピアノ、和声学、唱歌を教え、演奏者としても活躍した。『小学唱歌集』等に和声付けを行い、『日本楽譜』や『落梅』も作曲している。

《憲法発布之頌》は、借用和音や転調も用いられているが、基本的には A dur、イ長調。付点音符や三連符で構成されたピアノ伴奏が 4 小節の前奏を弾くと、混声四部合唱が憲法発布の寿ぎを意気揚々と歌い始める。(仲辻)

2. 《四季の瀧》東くめ（作歌）／瀧廉太郎（作曲）

“Waterfall of Four Seasons” Kumi Higashi (Lyrics)/ Rentarō Taki (Composer)



(左から) 東くめ、瀧廉太郎

東くめ(旧姓:由比)は東京音楽学校で瀧廉太郎の二年先輩であった。二人がタッグを組んだ幼稚園唱歌の作品には、他に《鳩ぼっぼ》や《お正月》などがある。くめが結婚してからも、瀧が来訪してわずか 20 分ほどで曲を完成させたという逸話も残っている。

作歌者のくめは、同校の在学時代から雑誌『音楽』に四篇の歌を発表していた。明治 28 (1895) 年くめが 18 歳の時に《四季の瀧》の歌詞が作られ、瀧が音楽をつけたが、当時は出版まで至らなかった。しかし後に評価され、1937 年には国語の教科書『昭和女子国史』に掲載された。

また本史料室の寄贈資料に、1951 年頃にくめがラジオ放送のゲストとして出演した際の原稿(覚書)「七十三才の時 初めての放送」があり、その中で《四季の瀧》にも言及されている。(齋藤)

3. 《神武東征》鳥居忱（作歌）／G. F. ヘンデル（作曲）

“Jinmutousei” Makoto Torii (Lyrics)/G.F. Handel (Composer)



(左から) 鳥居忱、G. F. ヘンデル

《神武東征》は G. F. ヘンデルが作曲した《Messiah》の〈Hallelujah〉に日本語の歌詞がつけられた作品である。明治 30 年代の卒業式でたびたび歌われ、明治 39 (1906) 年の演奏に関しては「合唱高低二部の妙緩急調節の変化得も云はれず」(『時事新報』1906 年 7 月 9 日)、「極めて荘厳」(『毎日新聞』1906 年 7 月 10 日)等の批評がある。

歌詞は原詞を翻訳した「訳詞」ではなく、原詞と緩やかな関連性をもつ「作歌」である。明治時代における東京音楽学校の演奏会では、「作歌」による声楽曲がよく奏された。今回の演奏は、東京藝術大学附属図書館所蔵楽譜に書き込まれた日本語の歌詞、すなわち鳥居忱の「作歌」による¹。

ドイツ語の原詞では「ハレルヤ」を繰り返して「神」への賛美をうたうが、鳥居の作歌では言葉を変えて神武天皇の国づくりを歌い込む。キリスト教における創造主は、近代日本の政治的・文化的・精神的背景を以て神武天皇の物語に変換された。どちらの歌詞も躍動的な曲調にあわせて朗々と歌われるが、とりわけ《神武東征》は作歌当時の時代性を強く帯びている。(仲辻)

¹ 『東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立——東アジアの視点を交えて——』平成 20~23 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究課題番号 20320030 研究成果報告書、研究代表者：大角欣矢、pp. 368-387。

4. 《菊の盃》 武島羽衣（作歌）／L. v. ベートーヴェン（作曲）

“O Welt, du bist so schön” (Kiku no Sakazuki) J. v. Rodenberg (Poetry), Hagoromo Takeshima (Lyrics)/L. v. Beethoven (Composer)



(左から) 武島羽衣、L.v.ベートーヴェン

原曲は J. v. ローデンベルクの詩に L. v.ベートーヴェンが作曲した《O Welt, du bist so schön [世界よ、おまえはとも美しい]》で、ベートーヴェンの《七重奏曲》変ホ長調 作品 20 (1799) 第 4 楽章の変奏曲の主題にこの旋律が使われている。「合唱 ベートーヴェン 菊の盃」が明治 38 (1905) 年 10 月から明治 40 年 3 月まで、東京音楽学校の定期演奏会や卒業式で演奏されたことが演奏会資料よりわかり、その歌詞も学校の歌詞綴から確認されていたが、それだけでは歌詞が音符にどう付けられていたかわからない。ところが当時の学生であった田中ろく（改正後は宇川 1886.2～1948.10）旧蔵資料が平成 27 (2015) 年、姪孫の吉川道子氏より寄贈されたなかに《菊の盃》の写譜が見つかり、歌詞付けを確認することができた。当時の音楽学校には写譜の授業があり、学生たちは合唱やレッスンに使う楽譜を何でも写譜した。田中ろくは秋入学だった東京音楽学校に明治 36 年 (1903) 入学、ピアノ専攻で本科を同 40 年 3 月に卒業し、研究科を同 42 (1909) 年に修了した。3 年先輩に三浦環、1 年後輩に山田耕筰がいた。 (橋本)

5. 《オルフォイス》 石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎（共訳）／C. W. グルック（作曲）

“Scenes from Orpheus” Kosaburō Ishikura, Saburō Otsukotsu, Toyokichi Yoshida, Itsugorō Kondō (Co-translation)/C. W. Gluck (Composer)



(左から) 石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎（『歌劇オルフォイス演奏記念』より。大島正規様・大島妙子様ご寄贈。）、C.W.グルック

明治 36 (1903) 年、東京音楽学校奏楽堂において演出つきで全幕舞台上演された《オルフォイス》は、日本人による初のオペラ上演である。このとき、エウリディーチェは「百合姫」と訳され、柴田環（三浦環）が演じている。オペラの「改革者」として著名な C. W. グルックの《Orfeo ed Euridice》が、石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎（朔風）の共訳によって、近代日本の音楽史に新たな局面を開くことになったのである。

令和 1 (2019) 年に大島正規様・大島妙子様より大学史史料室へ寄贈されたペータース版の出版譜 Gluck: *Orpheus Klavier-Auszug (nach der französischen Partitur)*, Edition Peters Nr. 54a には鉛筆で日本語歌詞が書き込まれており、この歌詞は『歌劇オルフォイス』（東文館、1903 年発行）の内容と一致する。本日の演奏では、歌詞の書き込みがほぼ完全に追跡できる部分を取り上げる。明治 36 (1903) 年に発行された『オルフォイス演奏記念』という写真帖も、楽譜の書き込みとともに当時の演奏時の様子を生き生きと伝えている。

(本プログラム表紙左下の写真:『歌劇オルフォイス演奏記念 明治卅六年七月廿三日』より《オルフォイス》第一幕第一齣) (仲辻)

6. 《東京湾凱旋観艦式記念行進曲》 吉本光蔵（作曲）

“Tokyo Wan Gaisen Kankanshiki Kinen Koushinkyoku” Kōzō/Mitsuzō Yoshimoto (Composer)



吉本光蔵（菊池武篤氏ご寄贈）

日露戦争後明治 38 年 (1905 年) 10 月 23 日に横浜沖で行われた、連合艦隊の凱旋観艦式のために作曲された。吉本光蔵 (1863-1907) は江戸に生まれ、海軍軍楽隊から初めてベルリンに留学した経験を持ち、クラリネットやピアノを演奏した。

日露戦争においても、吉本は第二艦隊軍楽隊として艦上での演奏に従事した。吉本の日記を見ると、10 月 23 日当日には行進曲について言及されていないものの、直前の 10 月 20 日に「観艦式行進曲ヲ起稿ス」との記載がある。尚、吉本の遺品の一部は当史料室に寄贈されている。 (齋藤)

7. 《^{どいつようちよう}獨逸膺懲の歌》吉丸一昌（作歌）、島崎赤太郎（作曲）

“German punishment song” Kazumasa Yoshimaru (Lyrics)/ Akatarō Shimazaki (Composer)



（左から）吉丸一昌、島崎赤太郎

大正3（1914）年8月23日、日本の新聞各紙はドイツとの「国交断絶」を報じた。同年同月、第一次世界大戦の戦火が拡大しイギリスがドイツへ宣戦布告したことで、イギリスの同盟国であった日本も「獨逸膺懲」（ようちよう：征伐しこらしめる）の立場に立たされた。

《獨逸膺懲の歌》の楽譜は、大正3（1914）年11月に「新聞の新聞社 帝国図書普及会」から発行された。付点音符がちりばめられたF dur、へ長調の快活な音楽だが、歌詞は時勢を如実に反映させている。7番から成る歌詞は、《早春賦》の作詞者として著名な吉丸一昌による。作曲を担当したのは、オルガニストとして活動し『オルガン教則本』（全2巻、共益商社楽器店、1899～1900年発行）を刊行したことで名高い島崎赤太郎である。島崎は小学唱歌や各地の校歌も作曲しており、昭和天皇の御製に島崎が曲をつけた《最上川》は現在の山形県歌となっている。（仲辻）

8. 《^{ひのたみ}我等は太陽民族》手塚義明（作歌）、信時潔（作曲）

“We are people of the sun” Yoshiaki Tezuka (Lyrics)/Kiyoshi Nobutoki (Composer)



（左から）手塚義明（『校歌の風景 中越地区小中校歌論考』折原明彦著 野島出版(1997)より）、信時潔

大正13（1924）年3月に東京音楽学校が新潟県知事の委嘱を受け、信時潔教授（1887-1965）が作曲した斉唱の作品。新潟県が「国民精神作興の唱歌」を「立国の大義を明かにし質実剛健を鼓吹するもの。唱歌は成る可く五節以内」との条件で懸賞募集し、一等賞になったのが手塚の歌詞である。「国民精神作興」は、大正12（1923）年11月、関東大震災で混乱する社会を、贅沢や危険思想を戒めることで安定させようと発布された「国民精神作興ノ詔書」に沿ったもの。東京音楽学校の『自大正五年五月 至大正十五年五月 作曲依託関係書類』には《我等は太陽民族》作曲の依頼状、歌詞懸賞募集広告、歌詞原稿、楽譜などが残されている。曲の冒頭には「快活雄大に」と書かれ、力強い曲調となっている。作曲者の信時は《海ゆかば》《海道東征》他、多数の歌曲で知られる。手塚義明（1881-1965）は新潟県六日町中学校や新潟県立三条中学校などの校長を歴任した教育者で、手塚が昭和3年に作詞した同校校歌の作曲者も信時であった。手塚は県内の学校の校歌作詞も多く手がけた。（橋本）

9. 《^{くにたみ}生きよ、國民 一結核豫防の歌一》内務省、東京音楽学校（編）、川路柳虹（作歌）下總覺三[皖一]（作曲）

“Live, the people: the song of tuberculosis prevention” Shimoosa Kakuzō (Kan' ichi) (Composer)



（左から）川路柳虹、下總覺三[皖一]

昭和11（1936）年に東京音楽学校が内務省より作詞・作曲を委嘱された作品。同年のうちに楽譜が出版され、レコードも発売された。結核は昭和14（1939）年には年、年間15万人（人口10万対率218）が死亡するほどの猛威を奮い（「結核予防会20周年小史」より）、予防に重点を置いた国民的活動や行政の対応を補完する機能を持つ民間団体の設立が求められていた。同年4月28日皇后陛下より令旨を賜り、公益財団法人結核予防会が設立された。この後、それまでタブーであった「結核」という言葉が公の場で多く取り上げられるようになり、結核予防会の様々な事業（講演会や映画会、展覧会など）が開始された。（齋藤）

10. 《日獨伊防共の歌》土井晩翠（作歌）／相浦清子（原曲）、下總皖一[覺三]（編曲）

“Tripartite Pact of Japan, Germany and Italy” Bansui Doi (Lyrics)/Kiyoko Aiura (Original song), Kan' ichi (Kakuzō) Shimoosa (Arranger)



（左から）土井晩翠（『わが第二高等学校』(1976)より）、相浦清子、下總皖一[覺三]

東京音楽学校内で昭和12（1937）年11月までに《日獨伊三国防共同盟の歌》作曲の募集がかけられ、応募作品は20作現存し、師範科と本科から男女の偏りなく応募があった。第一席となった相浦（本科二年）の原曲は単旋律で、下總教授により四部合唱に編曲され《日獨伊防共の歌》として発表された。相浦の直筆譜ではホ長調であるが、編曲ではヘ長調に変わっており、これはおそらく下總が合唱曲としての歌いやすさを考慮してのことであろう。そして、同年11月30日に[東京日独?]文化協会主催の親善音楽会にて披露された。

相浦清子（誕生：1918年、福岡県 帰天：2003年、ローマ）について少し言及しておこう。相浦は卒業後カトリック教会の修道女として、昭和47（1972）年にローマに派遣されるまで聖心侍女修道会および清泉女学院で奉仕し、音楽や音楽倫理の教鞭を取った。相浦の東京音楽学校時代の様子について、同修道会の歴史本の中で回想されている。同書によれば、相浦は隙あらば先生に質問を繰り返す、非常に好奇心旺盛で愛嬌のある学生であったということである。（齋藤）

11. 無題（アレグレット イ短調）鬼頭恭一（作曲）

Untitled (Allegretto) in A minor Kyōichi Kitō (Composer)



鬼頭恭一（佐藤明子氏ご寄贈）

鬼頭は大正11（1922）年6月10日愛知県生まれ。昭和17（1942）年東京音楽学校予科に入学し、翌18年本科作曲部に進み、作曲を信時潔、橋本國彦、細川碧に師事した。同年10月在学徴集延期臨時特例により11月15日仮卒業となり、12月大竹海兵団に入団。三重、築城、神町を経て霞ヶ浦海軍航空隊に配属となり昭和20年7月29日「秋水」の練習機での飛行訓練中の事故により殉職。無題（アレグレット イ短調）はピアノ独奏のための作品で、タイトルはなく、便宜上、冒頭の「[=60] Allegretto」から「アレグレット」と呼ばれる。作曲年月日不明。鉛筆書きで五線紙8ページに書かれ、一部まだ推敲中と見受けられる部分もある。a-b-aの三部形式。4分の2拍子の主部は決然と力強く、中間部はニ長調8分の6拍子、meno mossoに転じ、優美な舞踏を思わせる。2015年7月27日音楽学部第1回オープンキャンパスにて渡辺健二（奏楽堂）、2018年7月22日「戦没学生のメッセージII シンポジウム「今学徒出陣をどうとらえるか」（第6ホール）及び29日「戦没学生のメッセージII トークイン・コンサート 戦時下の音楽教師と生徒」（奏楽堂）にて田中翔平により演奏された。鬼頭にはもう1曲、築城時代の昭和19年7月の旋律楽器とピアノのためのハ長調の無題の作品があり、こちらも冒頭の「Allegretto」から「アレグレット」と呼ばれる。（橋本）

12. 《秋に隠れて》島崎藤村（詩）、草川宏（作曲）

“Hiding in the Fall” Tōson Shimazaki (Poetry)/Hiroshi Kusakawa (Composer)



（左から）島崎藤村、草川宏

草川は大正10（1921）年10月28日東京生まれ。父は作曲家の草川信（1893-1948）。昭和15年東京音楽学校予科に入学し、気の合う学友に恵まれ翌年本科作曲部、昭和18年9月に繰上げ卒業後は研究科に進み、信時潔、下總皖一、橋本國彦、H. フェルマーに学ぶ。昭和19年6月15日応召。翌20年6月2日フィリピン・ルソン島バギオ北部ポントック道にて戦死した。

島崎藤村（明治5(1872)年2月17日～昭和18(1943)年8月22日）の『若菜集』の1篇による《秋に隠れて》は、秋の夕暮れに咲く白菊に寄せて、雄大な情景と細やかな情感を重ねている。草川の日記より、昭和19年の初め頃には書き上げていたと見られ、歌とピアノによる意欲的な表現を試みている。日記には声楽部同期の朴殷用の批評が記されている。朴は、表現を追求するあまり不自然なところがあり転調にぎこちなさもあるが、以前より進歩したと忌憚のない指摘をしている。草川はいつか藤村詩による歌曲集を出版したいと願っていた。（橋本）

13. 無題 (かなしひものよ) 作詞者未詳、葛原守 (作曲)

Untitled (Kanashii Mono yo) Mamoru Kuzuhara (Composer)



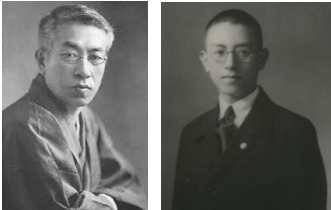
葛原守

葛原は大正 11 (1922) 年 10 月 22 日生まれ。昭和 15 (1940) 年東京音楽学校予科に入学しピアノを専攻した。同期の中田喜直、畑中良輔、草川宏らと親交あり「コン吉」「コンちゃん」と呼ばれた。昭和 18 年 9 月本科から研究科に進んだが昭和 19 年 3 月応召し、フィリピンで罹病し、翌 20 年 4 月 12 日台北陸軍病院円山臨時分院にて戦病死した。

歌詞について家族は自作と考えているが未詳。タイトルが付けられていないため、歌詞冒頭の「かなしひものよ」を便宜上タイトルとしている。五線紙見開き 2 頁に書かれ、レッスンで添削を受けた形跡はない。作曲年月日も不明であるが、冒頭の旋律が昭和 17 年に作曲されたオーボエ 2 作品にも現れ、葛原はこの旋律を気に入っていたと推測される。昭和 17 年 5 月に兄・丘 (たかし) が戦死したこととの関連も考えられる。平成 26 (2014) 年 11 月 23 日、父・幽 (しげる) の郷里・福山市神辺町 (かんなべちょう) の「第 39 回神辺音楽祭」にて村上彩子のソプラノ、佐藤恵美子のピアノにより演奏された。本学では平成 29 (2017) 年 7 月 30 日「戦没学生のメッセージ」にて金持亜実のソプラノ、松岡あさひのピアノで演奏して以来、金持が度々歌い、ソプラノの前中榮子がリサイタルで演奏している。(橋本)

14. 《小兎のうた》島崎藤村 (詩)、村野弘二 (作曲)

“Kousagi no Uta” Tōson Shimazaki (Poetry)/Kōji Murano (Composer)



(左から) 島崎藤村、村野弘二 (中林敦子氏ご提供)

村野は大正 12(1923)年 7 月 30 日兵庫県に生まれ、中学 3 年生頃より独学で作曲に熱中し始めた。《小兎のうた》の楽譜にある「昭和十六年六月三日」は、村野が中学校を卒業し東京音楽学校受験に備えていた時期で、「小島先生に」との献辞がある。小島先生とは昭和 10 年に東京音楽学校を卒業し村野家の近所に住んでいたソプラノ歌手・小島幸 (旧姓竹内) である。彼の創作意欲にも影響を与えた人物だったのであろう。《小兎のうた》は、西洋の和声に日本的旋法を合わせ、前打音がこぶしのように入る。情景描写と農民と小兎の滑稽味のある掛け合いが聴きどころである。2017 年 11 月 23 日「戦没学生のメッセージ～アーカイブ推進コンサート」、2018 年 7 月 29 日「戦没学生のメッセージ 2 教師と生徒」、2021 年 8 月 7 日「戦没学生のメッセージ 3 里帰りコンサート in 旧奏楽堂」にていずれも山下裕賀のメゾソプラノ、松岡あさひのピアノにより演奏された。

村野は昭和 17 年 4 月、東京音楽学校予科に入学し、翌 18 年に本科作曲部に進むが、同年 12 月「学徒出陣」により入隊し、昭和 20 年 8 月 21 日フィリピン・ルソン島ブンヒヤンにて自決した。(橋本)

15. 《ふるさとの》三木露風 (詩) / 戸田盛忠 (作曲)

“Furusato No (Hometown)” Rofu Miki (Poetry) / Moritada Toda (Composer)



(左から) 三木露風、戸田盛忠

戸田は大正 9 (1920) 年 4 月 12 日、東京に生まれ、昭和 13 年 4 月、東京音楽学校予科に入学しピアノを専攻した。永井進に師事し、昭和 16 年 12 月本科を卒業した。研究科に在学しピアニストとして活動開始していたが、昭和 18 年 3 月に応召により休学し、第二十七師団支那駐屯歩兵第二聯隊に配属され、昭和 20 年 4 月、中華民国湖南省にて戦病死した。兄の戸田邦雄は外交官のキャリアを持つ作曲家、妹の戸田敏子は声楽家で東京藝術大学名誉教授であった。

《ふるさとの》は山田耕筰編《日本独唱曲集Ⅳ》(1951) に収められている。歌い手にもピアニストにも情感豊かな表現が求められ、技巧的でドラマティックなピアノパートも聴きどころである。戸田の作品として唯一確認される作品で、作曲年不明である。兄の戸田邦雄も同じ詩に作曲している。山田が戸田の作品を知った経緯や、出版時に戸田の戦没を知っていたかは定かではない。2020 年 12 月 6 日 I LOVE YOU プロジェクト「戦争の時代の芸術」にて中嶋克彦のテノール、松岡あさひのピアノにより演奏された。(橋本)

16. 《春夏秋冬》 杉田好夫（詩）／鈴木正三（作曲）

“Spring, Summer, Autumn, Winter” Yoshio Sugita (Poetry)/Shōzō Suzuki (Composer)



鈴木正三（日高三美子氏ご提供）

鈴木は大正4（1915）年4月1日、東京生まれ。昭和10年、東京音楽学校予科入学（フルート）。同校助教授となりフルート奏者、吹奏楽・管弦楽指揮者として活動。昭和17年8月の東京音楽学校の満州建国十周年慶祝演奏旅行の合唱指揮を務めた。『フルート独奏曲集』（1940）、『フルート小品集』（1943）を編集出版。昭和18年応召し、立歩兵第四十七大隊に配属され、昭和20年8月23日、中華民国江蘇省武進県の野戦病院にて戦病死した。

《春夏秋冬》は、ご息女によれば新婚の鈴木が戦地から妻・寿子さん（同期入学で声楽部卒）に宛てた葉書1枚に旋律が1曲ずつ、計4枚に書かれていた。作詞者は野戦病院で同室だった人との伝聞である。2008年に鈴木門下のフルーティストで作曲家の川崎優（1924-2018）がそれらの旋律にピアノ伴奏付けをした。今回もその編曲版で演奏する。2020年12月6日 I LOVE YOU プロジェクト「戦争の時代の芸術」にて金持亜実のソプラノ、松岡あさひのピアノにより演奏された。川崎自身も昭和18年に入学した東京音楽学校在学中に召集されたが、ソ満国境で「音感教育要員」として帰国命令を受け、西宮の陸軍船舶部隊配属となり、病気療養中の広島で被爆した。（橋本）

17. 《泉石》 北原白秋（詩）／岡田二郎（作曲）

“Senseki (Springs and Stones)” Hakushū Kitahara (Poetry)/Jirō Okada (Composer)

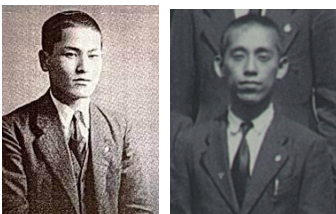


（左から）北原白秋、岡田二郎（岡田晋輔氏ご寄贈）

岡田（明治38[1905]. 7. 12～昭和20[1945]. 8. 25）は昭和前期のヴァイオリニスト。大正14年4月、東京音楽学校に入学し、研究科修了後は後進と海軍軍楽生にヴァイオリンを指導した。東京音楽学校管絃楽部員としてマーラーやブルックナーの交響曲の日本初演に関わった。昭和20年3月、東京の空襲激化を受け助教授を依願退職して一家で郷里の広島に移り、県立第二高等女学校に就職。原爆が投下された8月6日、爆心から2.5キロの自宅から妻は胸を打撲した次男を背負い、長男は父のヴァイオリンを担いで300メートルほど先の妻の里へ逃げた。岡田は翌日から爆心地付近で恩師や親戚を探し体調を崩した。《泉石》（二部合唱）は北原白秋『海豹と雲』（1929）の一篇。2020年12月6日 I LOVE YOU プロジェクト「戦争の時代の芸術」のコンサートにて金持亜実のソプラノ、関口直仁のバリトン、松岡あさひのピアノにより演奏された。穏やかに流れるピアノ前奏に導かれ、歌とピアノのアンサンブルを繰り広げる。乗杉嘉壽東京音楽学校長編『音楽』（1937）第四巻に収められる。『音楽』は師範学校、高等女学校および実業学校の音楽教科用に編集された全5冊からなる曲集で、同校の教員や卒業生の新作が収められる。（橋本）

18. 《別れの曲》 太田博（詩）／東風平恵位（作曲）

“Farewell” Hiroshi Ōta (Poetry)/Keii Kochinda (Composer)



（左から）太田博（『太田博遺稿集』福島県立郡山商業学校同窓会 無名詩人遺稿集編集委員会編（2010）より）、東風平恵位

東風平は大正11（1922）年3月10日、現在の沖縄県宮古市に生まれた。昭和18年9月に東京音楽学校甲種師範科を卒業し、沖縄師範学校女子部の音楽教師となる。昭和20年、看護要員として動員された生徒（ひめゆり学徒隊）を引率、6月19日、米軍のガス弾攻撃により陸軍病院第三外科壕（現糸満市）にて殉職した。《別れの曲》は、生徒が学徒動員で陣地構築した時の、指揮官・太田博少尉（1921-45）と生徒の出会いから生まれた。太田は郡山商業学校（現福島県立郡山商業高等学校）を卒業した銀行員で詩人でもあった。太田は女子学生の献身に心打たれ、卒業の饞にと「別れの曲」の詩を贈った。東風平は音楽室の黒板に音符を書き、学生たちはそれを練習し暗譜した。多くの学生が沖縄戦の犠牲となったが、戦後に再会した卒業生・学生が歌い継いできた。複数の採譜と編曲が存在するが、作曲の原形を特定することは難しくなっている。2020年12月6日、東京藝大 I LOVE YOU プロジェクト「戦争の時代の音楽」にて、富士川正美の台本と演出により朗読劇『消えた歌声 ひめゆりの別れ～歌と朗読による』が本学第6ホールにて上演された。劇中で出演者が歌うため松岡あさひが《別れの曲》を新たに編曲し、今回の演奏も同じ編曲版による。（橋本）

19. 《支那歴朝閨秀詩抄》より 〈ほろほろと〉 劉妙容（原詩）、〈十五夜〉 崔鶯鶯（原詩）、〈鐘〉 席佩蘭（原詩） 那珂秀穂（訳詩）／ 柏木俊夫（作曲）

“Shina rekichō keishū shishō” Hideho Naka (Translated poem)/ Toshio Kashiwagi (Composer)



柏木俊夫

昭和 19（1944）年に作られた独唱曲で、楽譜は昭和 48（1973）年に日本作曲家協議会から出版された。（出版譜のタイトルは「中国歴朝閨秀詩集」。）

『支那歴朝閨秀詩抄』は昭和 18（1943）年に出版された那珂秀穂の訳詩集で、外交官の市河彦太郎からこの詩集を貸与された柏木俊夫が同書より 12 篇を選定し曲を付けた。

柏木俊夫は東京音楽学校本科作曲部の第 1 期生（1936 年卒業）である。在学中にクラウド・プリングスハイムや信時潔の薫陶を受けた。

自筆譜は平成 30（2018）年に大学史料室へ寄贈された。流麗な水彩画が表紙をいろいろの清書譜の巻末には「歌曲集の餘白に」と「書簡に代へて 市河先生に」という書き出しの文章が記載されている。「歌曲集の餘白に」から、〈ほろほろと〉の作曲で停頓を重ねたこと、〈十五夜〉では陽旋法の使用を試みたこと、〈鐘〉で意図して象徴的な音型を用いたことがわかる。また、自筆譜には「本歌曲集が聊か日華親善の一助ともなれば作曲者の喜び之に過ぎたるはない。」とも記されている。（仲辻）

『支那歴朝閨秀詩抄』（那珂秀穂訳詩）と中国語の詩集について

◆那珂秀穂と『支那歴朝閨秀詩抄』

『支那歴朝閨秀詩抄』は、1943 年（昭和 18）に地平社より出版された中国歴代の女流詩人の作品を編集した訳詩集である。1947 年（昭和 22）に『支那歴朝閨秀詩集』が同じ出版社より出版されたが、両者の違いはタイトルと定価だけである。

訳者の那珂秀穂については、ほとんど情報不明だが、『支那歴朝閨秀詩抄』のまえがきによれば、那珂が中学の半ば頃「佐藤春夫氏の名譯がついてある薛濤（注：せつとう 768-831 唐代の妓女、詩人。白居易や元稹らと親交があったという）の詩に初めて接した」ことが支那女流詩人の詩の魅力に取り付かれたきっかけだったようだ。『支那歴朝閨秀詩抄』に収録された中国の漢代から明清まで約 146 編のうち、明代までの詩は、中国語の詩集『名媛詩歸』を底本とし、清代の詩は「諸書を涉獵して」「明以前の体を繼いた」と記述されている。

◆中国語の詩集『名媛詩歸』

那珂秀穂の訳詩集の土台となったのは、中国明代末期の詩人・文人である鍾惺（しょうせい、1574-1625）が編集した『名媛詩歸』である。鍾惺は、明末の文学グループ、竟陵（きやうりやう）派の代表的な詩人である。『名媛詩歸』は計 36 巻、中国の上古神話時代から明代まで約 350 人の女流詩人の約 1600 の作品が収録された。

中国の明清時代は、多くの女性が文化や文学に参加したという点で史上空前の盛事であった。女流詩人や作家の群体は大量に出現し、文学団体の結成も盛んであった。また明清時代の文人が女流作家を積極的に賞賛したことが、女流文学の隆盛に寄与し、女流作品の編集と出版のブームを引き起こすことになった。『名媛詩歸』はその代表的な詩集の一つで、その特徴は、単なる詩集ではなく、詩に対する編集者の評論も書かれていることである。

◆演奏曲目 〈ほろほろと〉、〈十五夜〉、〈鐘〉

今回演奏される 3 曲 〈ほろほろと〉、〈十五夜〉、〈鐘〉の詩を中国語の原本と照らし合わせてみた。

〈ほろほろと〉の作者は、晋時代の女流詩人・劉妙容である。劉妙容は優れた県知事として知られた劉恵明の娘であり、箏篋（注：ハープに似た撥弦楽器）の演奏をよくしたという。出処は『名媛詩歸』第 3 巻であり、元タイトルは

『宛轉歌』である。もともとは2篇があるが、今回に収録されたのは『宛轉歌』その一（図1²）である。タイトルの意味は、婉曲に想いを伝える歌という意味だが、那珂の「ほろほろと」の翻訳で非常に絶妙な印象が残った。

〈十五夜〉の作者は崔鶯鶯と書かれているが、実際に『名媛詩歸』の原文と照らし合わせてみると、崔鶯鶯の詩は掲載されていなかった。『十五夜』という詩の元タイトルは、『月明三五夜』である。実は詩の作者は唐代の男性詩人・文人、元稹である。詩の出处は元稹の短編小説『会真記』（別名：『鶯鶯伝』）で、作者の自伝的小説と考えられている。崔鶯鶯は主人公の女性であり、詩は崔鶯鶯が恋人の張生に贈ったものである。

〈鐘〉の作者は清代の女流詩人・席佩蘭である。彼女は、清代の名詩人袁枚の女性弟子であり、また詩人孫原湘の妻でもある。『鐘』の元タイトルは『聞鐘』（図2³）である。『支那歴朝閨秀詩抄』に収録された清代の詩は、那珂秀穂が諸書から網羅したものと前文に記されている。その出处は、席佩蘭の詩集『長真閣集』からの可能性が高いと思われる。

また『支那歴朝閨秀詩抄』の前書きには、那珂が「私は原作者の感情をしみじみといたはりながら譯した」と記述している。中国語の原本と照らし合わせてみたら、那珂の翻訳は単に詩の意味を翻訳するのではなく、その雰囲気や作者の心境も十分に伝えていると感じられる。

歌曲集の自筆譜には――出版譜には印刷されていないが――、柏木の曾祖父も祖父も儒者で漢学塾を開いたこと、父は医業の傍、漢詩創作を道楽としたと書かれていることから、柏木はもともと漢詩や中国に関心と親近感をいただいていたのであろう。彼はさらに曲が「聊か日華親善の一助ともなれば作曲者の喜びに過ぎたるはない」とも書いており、戦時下にあっても親善への願いを持っていたと思われる。ただし、柏木が当時の状況による「戦争」や「日華親善」に対してどのように理解していたのかを確認することは必要であろう。

今年、終戦から76年になる。戦争体験が風化しつつあるいまだからこそ、戦争に巻き込まれていた彼ら彼女たちの想いを、生の音楽で再現し、それが今に生きている私たちの心に届く、響いていく。平和への祈りは、国境線を越えて、いつでもどこでも一緒である。

（鄭 曉麗）

東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻（音楽学）博士課程4年
大学史料室アーカイブ・アシスタント

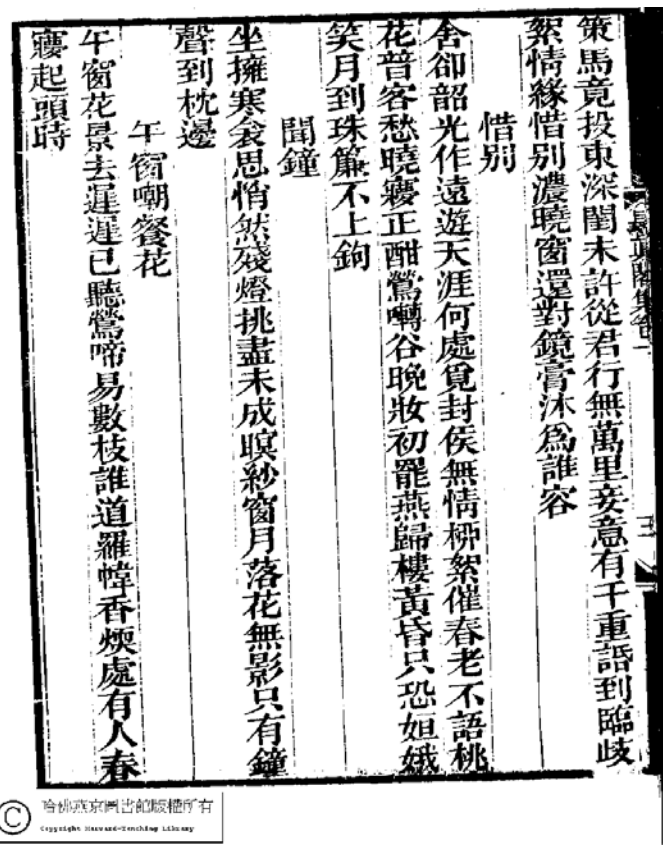
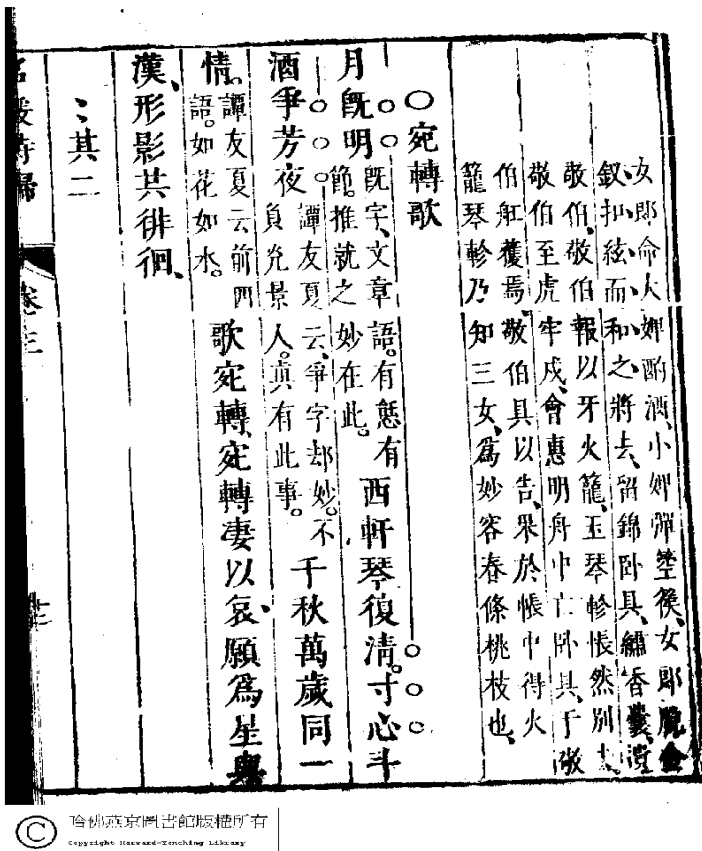


図1: 『宛轉歌』、『名媛詩歸』第3巻

図2: 『聞鐘』、『長真閣集』

² 『宛轉歌』の原文、『名媛詩歸』第3巻、2021年8月28日閲覧。https://digital.library.mcgill.ca/page-turner-3/pageturner.php

³ 『聞鐘』の原文、『長真閣集』、2021年8月28日閲覧。

https://digital.library.mcgill.ca/mingqing/search/details-poem.php?poemID=27639&language=/

柏木俊夫《支那歴朝閨秀詩抄》自筆譜より（一）

書簡に代へて市河先生に

いつれの日も辱知を得ましたか定かには想起致しませんが
石室の昭和十七年初秋の頃先生と村山猶吉氏の企畫に於て私が
朝倉春子嬢と共に深田貞氏作曲の音楽会を催した前後の事
と記憶致します。當時先生はイラネより歸国された日尚浅く
大東軍戦争が激しや華僑の因行は包圍の勢に相闘つ
舞臺の街に化し争ひて難を逃れ歸国された頃の状況に
折にそれ伺つたの事思い出します。外務省に於ける御職務
の傍に諸方面の文化事業に御盡心のやり取り承知したか。麹町
の村山音楽研究所理事としての御発展にも御力添へされつ
てありますので、その頃研究所で合唱と管絃楽の指導もなされ
ました。私もその目もつと機会に恵まれました。同所にて
何かの都合ある度に先生は必度挨拶や講演をされましたが
含蓄あるお話しの内容に感服して、いつまでも私は会場の一隅
に傾聴致すの大いなる喜びとして居ました。

忘れず致しませぬ昭和十八年秋大東軍の戦雲が急迫し
戦火が擴大し内閣に於ける戦事非常措置を断行するの途に
至り、爲に各大学を整理統合の餘儀なされ、私は早稲田大学
講師の職を失職するといふ危殆に瀕しました。甚く憂鬱がましい
と思ひましたが、他に適當な相談相手もありませんので、私は思ひ
切つてお宅にお陳情いたしました。その頃報局主として大東軍省の
外務関係である国際文化振興会に交渉いたしました。案案を
その翌日したか丸の内明治ビルで午後二時に待合せし八階の
常務理事、黒田清由に御紹介頂戴しました。座談室にて細野の
某室を待つ間「この間は幸ひ内外文化に關する凡ゆる圖書が
蒐集されてゐる。戦火の頃お逢ひの書籍に日々親しむ事は
作曲家の將來に決り無意味な結果を齎すのではない」とい
ふ意味の事を話されました。黒田伯との面会が村下歸りの途
より「今日妻や英都子と夕飯を御一緒していかう」とい
う途中、毎日新聞社階上の工業俱樂部にて夕飯の後新橋驛
上り奥車と英都子嬢とお逢ひし。幸福で天ぷらと真魚腹
御馳走に、母にまつて土産の分を頂戴致しました。地下鉄
を降り渋谷よりバスの車中奥車が此處へと仰せられたので先生
との間に腰を掛けたせて頂戴しました。その夜に感謝の念に
溢れて居りました。私の胸は、涯に在る地上の處にすかり包み
た心地にて「自分は何かの幸福者だらう」と感徳の言葉
を口に、口の中を繰り返して繰り返しておりました。

国際文化振興会は内閣の方針である、減價簡素化の原
則に入会せず、改め、国際学会へ御推薦下さいませと、
御知己の宅を夜分お訪ねの上御依頼下さいましたか、今の
若くは下へ之も思ひ止るの外やむを得ず事情でした。

自分の斯く職を求めたのは自ら経済生活を確保す
といふ意味に止るのだから、たゞ文化振興会や学友の

事務員乃至教師として入会出来なくとも、藝術家としての目的の將來
に何等不幸を齎すのではないといふ事が自分によく判つたので、
一冊一冊に著しました。然し下り此の上先生に御心配を
煩はしては相済みぬといふ気持ちで、先生は猶も私の
様子不憐といふ御返事下さつた御様子でした。

或る朝先生は省への御出勤前、暗ればはした建前持て
御来訪下さい、「昨夜音楽振興会の理事会で自分……
此の社会情勢では作曲家は甚難沈滞せざるを得ない。作曲
活動の基盤を築くには將來のわが音楽文化の根を固めよう事
なる先づ以て作曲家を激励すべきである」と案議した
處、全會一致で提案を可決し、困難なる社会情勢に居
て「益々、須知の如く」と御励み下さいました。

又或る日曜日の朝に「福原さんといふ森林協会の取締
から作曲を頼まれた故作の次い」として福原氏作曲重
森林協会の増産戦士の報刊に載せられました。月一ヶ月程の
後に作曲完成が届けると、先生御自身、福原さんの爲に、か
御出費上、私に作曲料を御届け下さいました。作曲
奨励の御気持のみで有難き身に涙みたり居ります上、そのや
な御返事を下さりては恐縮なやむを得ず、御返上にお返りした
次第でした。

戦争三年にして敵アメリカは遠及攻め、真勢凄く太平洋
防衛の外郭島に於ては、バルバート、マレー等、於て我が
將士戦死するの報甚だしく傳はり、周旋以來の困難な思
はせました。私は國破れては、藝術生活なしと思ひ、國民の
一人として斯くの際曲を作つて行かざるに生産に従事の方
か、藝術家の倫理として正しいのではないかと、疑念に
疊み居りました。「ゲーテに勞務を強ひるは如何に國力
培養の所以なり」との且ての先生の御言葉、想ひを
「ゲーテならざる、幾力か自分も文化の領域を獲るべく再考致
しました。

その後わが經濟界は戦争と共に愈々逼迫し所謂
悪性インフレの狀態に近づきました。私は自分の將來に對
する先世の心配あり、一方結婚問題も借借して此の
際、寧ろ音楽を捨てて軍需会社に走り、と意を決して事は一
度に止りませんでした。併し作つた處に私は「心は光あ
らば……」といふ先生の御教訓を思ひ起しました。
天國の扉の前に立つ三人の少女のうらやまを持つた者のみか
入会を許可されたといふ聖書りの御訓を思い起した事
が出来ませんでした。

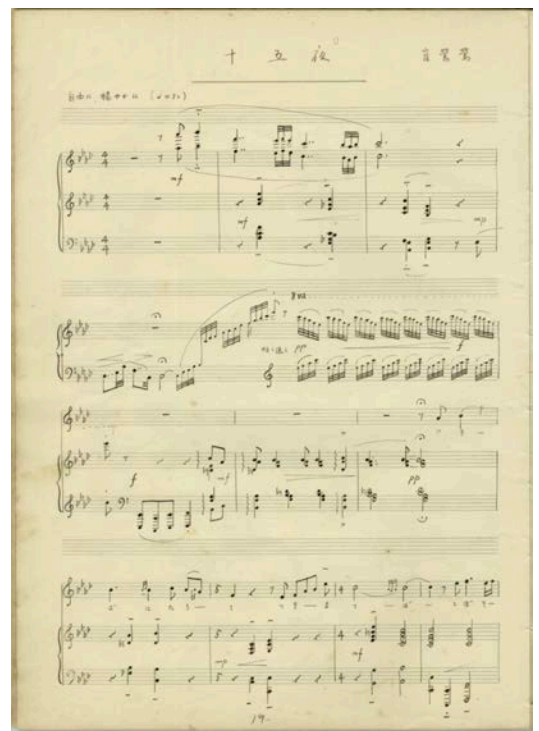
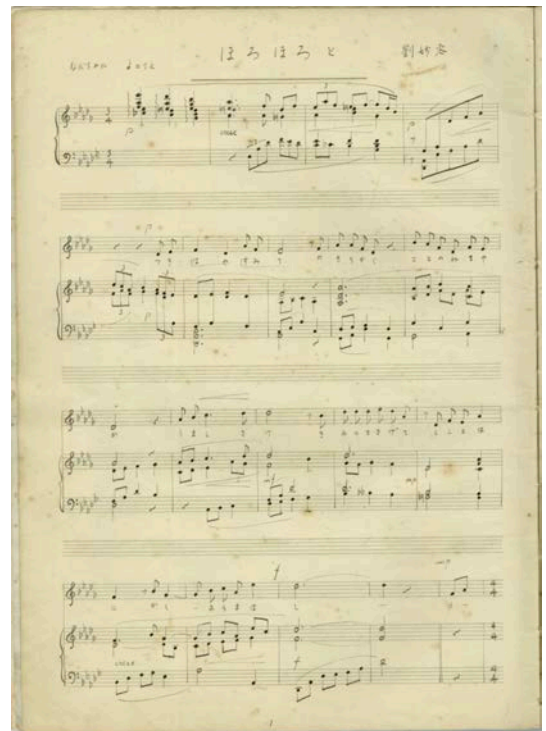
今年の初頭で下りお訪ねした折、此の様な情
作曲してみれば……といふ、甚だしい事と提示して下さつた
ので、此の支那歴朝閨秀詩抄でした。拜借して

柏木が東京音楽学校研究科作曲部を昭和13（1938）年3月に修了して6年を経た頃の作品である。
作曲の経緯とともに、戦時中に困窮した様子も伝えている。戦後に出版された楽譜には掲載されていない。
（寄贈：柏木成豪様）

柏木俊夫《支那歴朝閨秀詩抄》自筆譜より（二）

帰宅し折々編うち頻りに創意動き二月頃の作曲にかかりました
 然るに戦争生活は個人の日常を極度に拘束し毎日は雑用のみ
 忙殺され作曲に使倒す時間的余裕は次第に少くなりました
 程に加へて前述の精神的苦悶が音楽を放擲せざるやの土壤
 場にも「私」を追いつめました。此處に轉向しては先生の重なる
 御好意を台無しとするものであり旗色悪き時自己の障壁を放棄
 する事は男子といへば不意であらざる属おし幾回となくペンを
 握り直しました。斯る自己闘争と繰返す中作曲は少い
 づつ進んで行きましたかその教を直して従ひ自分の心境は
 次第に安定して來ました。その間先生の御教訓が絶えず自分を
 鞭撻下さつた事は申す迄もありません。朱男様が「文学の爲
 に死すとも希望を」とお話しになつた言葉は強く自分の胸に響
 きました。従来消極的であつた母も「お前が音楽で多少は認
 められやうになるまでわたしは以て存続するよ。毎令田地や家財
 を賣り拂つてもね」と助勢は呉れやうになりました。此處に到り
 自分は歩むべき道が唯一すがである事はつかりと意識致しました。
 以上の如き心境の中に此の曲集は生れましたので之等は必ずし
 自分を以て最高の作品のみとは申せなかつても知れませんが謂はば
 此の一年を通じての精神生活の記録とも申し長からうと思はれる
 纏たる贅言を用ひましたが厚知以來の御厚情身に餘り思ひ故に
 曲集一巻の宛書に當り過ぎる方々の思ひ出さきに感謝の念を
 断りにしたき所存であります。拙力なる自分は心の師父と仰い
 先生の数々の御恩顧に對しお禮へするに何物もなく、拙き一巻
 の琴のまさぐりを以て、敵弾下何時一序の石段と化すかも知
 れぬ現在の身のせめりもの誠然しとお受け下さるやうお願
 の致す次第であります

昭和19年12月5日
 大東亞戦争記念の日に
 柏木俊夫 敬白



(左) 前ページの続き。

(右上) 〈ほろほろと〉冒頭

(右下) 〈十五夜〉冒頭

(寄贈：柏木成豪様)

ディットリヒ《憲法発布之頌》（伊澤修二作歌）

大和の御民よ、我國民よ、いはへはいはへや、この大御代を。
めぐみの春風、しずかにわたり、かがやくみいつは、
あさひのごとく、八洲の内外を、くまなくてらす。

丑どし二月の十一日に、しきたまはせたる、大憲法こそ、
ためししられぬ、たまものなれや、われらが孫子のみたからなれや。

来たれやつどへや、我がはらからよ、つどひて祝へや、いざもろともに、
明治の帝の千代よろづ代を、ほぎたてまつれや、
あめつちさへも、とどろくばかりに、ほぎたてまつれ。

※ 『中等唱歌集』（東京音楽学校、一八八九年）四九頁参照。

同書の歌詞にルビはないが、ここでは必要と考えられる箇所ルビを記した。

瀧廉太郎《四季の瀧》（東くめ作歌）

みなぎり落つる瀧つ瀬を
おほひて咲ける山桜
散るは水泡か はた花か
わかちかねたる春の朝

ひるは白妙さらせりと
ながめしものをいぶかしや
月影清き夏の夜は
黄金のあやも見ゆるなり

世に珍しき仙姫の
織れる紅葉の唐錦
瀧の白糸よりかけて
衣や縫ふらん秋の夕

山をゆるがす水音も
静かになりぬ昨日今日
かけわたしたる玉簾は
氷柱結びし冬の瀧

ヘンデル《神武東征》（鳥居枕作歌）

天晴よ、めでたや。天晴よ、めでたや。肇國。

中洲は、美地。四周には、青山。美し。四周には、青山。美し。

六合の中心廣し、恢弘ましや、天業。皇師を、率させ、

中洲、征ち給ふ。天晴、皇師。起せよ、皇師。起せよ、皇師。

行けや、行けや、行けよや、行けよや。立てや、立てや、兵士、

兵士。

撃てや、撃てや、凶徒等、凶徒等。撃てや、凶徒。

立て立て、兵士。

國土の凶徒は、稜威に伏して、まつろひぬ。めでた、めでた、

めでたや、めでたや。天業、建るや基。

天晴、めでた、めでたや、肇國。

天晴、めでた、めでたや、肇國。

ベートーヴェン《菊の盃》（武島羽衣作歌）

いはへひとびと 千度百千度 御代はなが月 けふのよき日。

菊の盃を あつとりどりに 菊の盃を とりどりに

いはへひとびとちたびもちたび いとどかがやく 國のほまれ

菊の盃を ああとどりに 菊の盃をとりどりに。

グルック《オルフォイス》

（石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎（共訳））

(No. 1. CHOR)

嗚呼、小暗き森の中、百合姫、汝が墓に、魂魄たゞよはゞ、

聴け嘆、聴け嘆。

見よ涙、見よ涙。汝を嘆きそゞぐ。

遺されし、夫の嘆、悲しからずや。

汝が夫の嘆、涙はなきかや。

妻、あはれ、歸り來よや、往きし魂魄よ、夫のもと。

(No. 2. CHOR)

常世に、なぞ迷ひ入りて、幽界を冒す。浮世の人、誰ぞや。

汝が心、恐怖に死なん。

阿鼻地獄の、その聲、聞かずや。阿鼻地獄の、その聲、

聞かずや（※）。

汝が心、恐怖に死なん。阿鼻地獄の、その聲、聞かずや。

（※）部分の歌詞は楽譜に書き込みなし。

島崎赤太郎《獨逸膺懲の歌》（吉丸一昌 作歌）

※ルビは楽譜の歌詞ページの記載通り。

一、武力にほこりて正義を無みし、世界の、平和をかきみだす、
獨逸打つべし懲らせよと憤然起ちたり英佛露。

二、日本男児は義勇に富めり。同盟イギリス助けずば、
わが武士道に恥ありと、世界のいくさに加はれり。

三、亞細亞は祖先の墳墓の地なり。守護の任務を天に享けて、
雙肩重く荷へるは、帝國日本にあらざるか。

四、膠州灣内軍港築き、東亞の天地にわだかまる、
獨逸この時仆さずば、東亞の平和は期しがたし。

五、帝國日本の隆運そねみ、黃禍の世界に唱へしは、
六千餘萬の國民の、亡滅計るにあらざるか。

六、正義を唱ふる喇叭の聲に人道擁護の劍を振り、
天誅下せばたちまちに、落ちたり青島、膠州灣。

七、勝ちて誇るな、兜を締めよ。われ等らの任務はなほ果てず、
天に代りて成すべきは、むしろ今後にありと知れ。

信時潔《我等は太陽民族》（手塚義明 作歌）

我等は太陽民族 歴史を負いて
輝くゆくての みちをば踏まん
蒼空の太陽の如 君をば仰ぎ

自由の愛もて 祖国を抱かん

我等は太陽民族 身ぬちをめぐる

濁らぬ血潮ぞ 民族の誇り

我等の希望は 太陽の如 若し

我等の力は 太陽の如 強し

我等は太陽民族 み祖に稟けし

ゆるがぬ信仰ぞ 民族の生命

我等の心は 太陽の如 明し

我等の愛は 太陽の如 博し

我等は太陽民族 蒼空を仰ぎ

大地に根ざして 人とし萌えん

光のみ親が 萬有生む如く

人類栄ゆく 世界をば創生まん

生きよ、國民 — 結核豫防の歌 —

(内務省委嘱 東京音楽学校編 川路柳虹 作歌、下總覺三「皖二」作曲)

(一) 生きよ、國民、身をば鍛へて、
御國に盡すぞ吾らが務め。

任務は重く、希望に滿つる、
花咲く生命を蝕む菌に
犯され捨つるは罪ぞふかき。
吾らの力に病魔を倒せ。

(二) 生きよ、國民、心明るく、
輝く日光に、すがしき空氣、

規律を守り働くものは、
何をか怖れん、病も菌も。
漲る体力に溢るゝ希望、
予防の劍に病魔を倒せ。

(三) 生きよ、國民、身をも心も

御國に捧げて、清けく、つよく、
病患、よしや襲ひ来るとも、
みづから励みて、難きに耐へて、
鍛ふる身体に燃ゆる生命、
明るき光に病魔を倒せ。

日獨伊防共の歌 (日獨伊三国防共同盟の歌)

(東京音楽学校選曲、土井晚翠 作歌、

相浦清子 原曲、下總皖二「覺三」編曲)

(一)

抗日毎日の源いづれ ああかれ「共産」世界の詛ひ
西にはスペイン内乱起こし 同胞互ひに相食しむる
悪魔の横行 防ぐはたそや

(二)

極東平和の鍵手に握る 皇國日本と結びて起ちて
歐洲もなかに友ありドイツ 平和を秩序を破壊のもの
悪魔の猛焰 防ぐはわれら

(三)

今また南歐イタリア起てり 先には日本の武士道讃じ
少年団結白虎の隊を たたへしイタリア新たにこゝに
悪魔を防御の盟に参ず

(四)

今こそ見るべし悪魔のふるひ 神明否定の悪魔の嘆き
世界にわたりて平和と秩序 愛する四海の同胞ともに
奮ひて正義の盟に結べ

草川宏《秋に隠れて》（島崎藤村詩）

わが手に植ゑし白菊の
おのづからなる時くれれば
一もと花の夕暮ゆふぐれに
秋に隠れて窓にさくなり

葛原守 無題（かなしひものよ）

（作詞者未詳）

かなしひものよ わかれとは
やまのさくらは けさいふた
かなしひものよ わかれとは
うらのそよかぜ ゆーべいうた
（※今朝云ふた）
だからあなたよ はまにゆこー
（※浜に行かふ）
かなしひものよ わかれとは

村野弘二《小兎のうた》（島崎藤村詩）

ゆきてとらへよ 大麥の
畠にかくるゝ 小兎を
われらがつくる 麥畠むぎばたの
青くさかりと なるものを

たわにみのりし 穂のかげを
みだすはたれの たはむれぞ
麥まきどりの きなくより
丸根まるねに雨の かゝるまで

朝露あさつゆしげき 星影ほしかげに
片かたさがりなき 鋤くほまくら
ゆふづゝ沈む 山のはの
こだまにひゞく はたけうち
われらがつくる 麥畠の
青くさかりと なるものを
ゆきてとらへよ 大麥の
畠にかくるゝ 小兎を

戸田盛忠《ふるさとの》（三木露風詩）

ふるさとの小野の木立に
笛の音ねのうるむ月夜や
少女をとめ子は熱き心に
そをば聞き涙ながしき
十年とせ経ぬおなじころに
君泣くや母となりても

鈴木正三《春夏秋冬》（杉田好夫詩）

庭草の若芽の中にタンポポの
ゆさなに濡れて輝きて見ゆ

赤いざくろに白い雲
去年のあなたの思い出は
あらい芭蕉の葉のしたで
メエメエ子山羊と遊んでた
風が吹く 風が吹く
十九のあなたは泣いていた

柿の実の、みゆる小枝に夕日がさせば
万寿さげなり赤い花
二つ三つお辞儀する お辞儀する
鐘の音に

つれづれに筆とれば母としるしぬ
いろりばた、ほだたきて
しばしたたずむ、みぞれ空 みぞれ空
ぬれた鳥にくれてゆく くれてゆく

岡田二郎《泉石》（北原白秋詩）

萌黄の月の眉引に、
鶴は啼くなり、土のうへ。

水に揺れあふ風のかげ、
花はこもらふひつじぐさ。

にほひをさなき泉石の
色のあひさにまじらへば、

蒼き夜ごろは貴くて、
ほのかなるものみな愛し。

東風平恵位《別れの曲》（太田博詩）

目に親し 相思樹並木
ゆきかえり 去り難けれど
夢の如 疾き年月の

ゆきにけん 後ぞくやしき
学舎の 赤きいらかも
別れなば なつかしからん
吾が寮に 睦みし友よ
忘るるな 離り住むとも

業なりて 巢立つよろこび
いや深き 嘆きぞこもる
いざ去らば いとしの友よ
何時の日か 再び逢わん

微笑みて 吾等おくらん
すぎし日の 思い出秘めし
澄みまさる 明るきまみよ
すこやかに 幸多かれと
幸多かれと

柏木俊夫《支那歷朝閨秀詩抄》（那珂秀穂 訳詩）

〈ほろほろと〉（劉妙容 原詩）

月はや 澄みて

軒ちかく 琴の音さやか

美し酒 君にささげて

とことにはに かくあらまほし

歌をうたへば

ほろほろと 何か哀しや

星となり 銀河となりて

さまよはむ 影の形に添ふごとく

かなし いたまし

ながるるは 涙のみなる

色も香も消えてあとなく

誰がために奏づる琴ぞ

歌をうたへば

ほろほろと清みて悲しや

霧となり 煙となりて

天霧らひ 互みに添はむ

〈十五夜〉（崔鶯鶯 原詩）

簷のばに立ちて月待てば

とぼそを叩く風の音

垣をへだててそよぐ花

ついだまされぬ嬉し人かと

〈鐘〉（席佩蘭 原詩）

寒ければ衾のかづけどわびしかり

燈のもいつか燃えはてて眠りあへぬに

窓の月沈みて花の影もなく

聞ゆるものはほのかなる夜半の鐘のみ

出演者プロフィール



© Taira Tairadate

谷本 喜基 Yoshiki TANIMOTO (Cond.)

和歌山県出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。都内を中心に様々な合唱団の指揮者を務めるほか、アンサンブル歌手、ピアニスト、イングリッシュハンドベル奏者としても精力的に活動している。2019年3月に東京藝大内で上演されたオペラ《長安悲恋》(松下功作曲・湯浅卓雄指揮)では同大学在学・卒業生で構成された特別合唱団の指揮を務め、公演を成功に導いた。Vocal Ensemble 歌譜喜、ヴォーカル・アンサンブル カベラメンバー。プロ室内合唱団「Icola Chamber Choir」主宰、オンライン合唱団「Icola Remote Choir」音楽監督。



瀧本 真己 Maki TAKIMOTO (Sop.)

東京藝術大学ソプラノ専攻卒業。これまでに、音楽劇『赤毛のアン』(アン役)や、劇団四季『ノートルダムの鐘』など数々の舞台に出演。2020年12月には、日本武道館にて行われた音楽朗読劇『アルケミスト・レナトス』にメインボーカルとして参加。2014年より「芸大とあそぼう in 北とびあ」に連続出演。2021年4月に放送開始のTVアニメ「MARS RED」にて劇伴歌を担当。“NHK 水戸児童合唱団”副指揮者。



河野アンジェラ Angela KONO (Sop.)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。テレビLCV主催の子どものためのコンサート出演。岡幸二郎「ベスト・オブミュージカルVI」アンサンブルメンバー。音楽朗読劇 Reading High「El Galleon」コーラス隊。音楽劇「ヤマガヒ〜とうとう〜」ヘビ役、オペラ「フィガロの結婚」バルバリーナ、「コジ・ファン・トゥッテ」デスピーナを演じる。合唱指導、ボイストレーニング、CM出演など幅広く活動している。声楽を牧野美紀子、寺谷千枝子の各氏に師事。



岡 うらら Urara OKA (Sop.)

香川県出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。現在、同大学院修士課程声楽専攻に在籍。第66回全日本学生音楽コンクール全国大会入賞。第34回香川音楽コンクール声楽部門大学・一般の部第一位。令和3年度よんでん文化振興財団奨学生。二期会研修所本科修了。これまでに中野勝美、大島洋子、萩原潤の各氏に師事。



坂口 真由 Mayu SAKAGUCHI (Sop.)

鹿児島県出身。NHK鹿児島児童合唱団第1期生として小学4年次から5年間活動。高校2年次より本格的に声楽を学び始める。鹿児島県立鹿児島中央高校卒業、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業、現在同大学院音楽研究科修士課程独唱専攻1年次に在学中。これまでに齊藤玲子、永井和子の各氏に師事。



吉田 瑛美 Eimi YOSHIDA (Mezzo Sop.)

高松第一高等学校音楽科、東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。これまでに、劇団四季『オペラ座の怪人』、『ノートルダムの鐘』等の舞台に出演。音楽朗読劇 Reading High「El Galleon」のコーラス、モーツァルト《レクイエム》のアルトソリストを務める。声楽を岡崎矛日子、佐藤ひさらの各氏に師事。



瀬戸 優貴子 Yukiko SETO (Mezzo Sop.)

京都府出身。京都市立音楽高等学校（現京都市立京都堀川音楽高等学校）卒業、同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業、東京藝術大学卒業、現在同大学院音楽研究科修士課程3年在籍中。日本声楽アカデミー准会員。合唱団 Esquisses de Voix 指導者。同志社女子大学オーケストラ定期演奏会にソリストとして同楽団と共演。京都音楽家クラブ新人演奏会に出演。「ラ・フォル・ジュルネ TOKYO2019」千住明作曲・指揮オペラ《万葉集》でソリストを務める。



岩石 智華子 Chikako IWAISHI (Mezzo Sop.)

横浜市出身。東京藝術大学音楽学部声楽科を経て同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻に在籍。声楽を稲葉明子、大島洋子、三縄みどり、手嶋真佐子の各氏に師事。第68回全日本学生音楽コンクール第3位、第16回日本演奏家コンクール第1位を受賞。藝大大学院オペラ《フィガロの結婚》で花娘役を演じるほか、ベートーヴェン《第九》や、モーツァルト《戴冠ミサ》《レクイエム》等のアルトソリストを務める。



野間 愛 Ai NOMA (Alt.)

徳島県出身。徳島文理大学音楽学部、東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業、同大学大学院音楽研究科オペラ専攻の修士課程、博士後期過程を修了し音楽博士号を取得。オペラや宗教曲のソリストから声楽アンサンブルまで幅広く活動している。これまでに稲富祐香子、熊谷公博、永井和子、葉玉洋子の各氏に師事。日本語による新しいオペラ制作を行う任意団体「オペラのまど」代表、よんでん文化振興財団奨学生、日本ロッシーニ協会会員、現在東京藝術大学附属高校非常勤講師。



市川 泰明 Yasuaki ICHIKAWA (Ten.)

東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。同大学大学院修士課程古楽科バロック声楽専攻修了。軽やかな声質を持ち味とし、バロック期の作品を主なレパートリーとする。またアンサンブルも得意とし、杜の音シンガーズ、ハルモニアンアンサンブルとして BS-TBS「日本名曲アルバム」ほか、様々なコンサートに出演している。これまでに声楽を栗林義信氏、川上洋司氏に、バロック声楽を野々下由香里氏に師事。



寺島 弘城 Hiroki TERAJIMA (Ten.)

香川県出身。東京藝術大学声楽科卒業。同大学院修士課程を経て、現在博士後期過程2年に在籍。第33回香川音楽コンクール大学・一般声楽部門第1位。その他、多数のコンクールに上位入賞。これまでに、《マタイ受難曲》《メサイア》《第九》《エリヤ》のソリストを務めた。2013年高松市芸術団体協議会ブルーポラリス新人賞を受賞。平成30年度よんでん文化振興財団奨学生。大学院在学中に長野羊奈子賞、毛利準賞を受賞。



頓所 里樹 Riki TONSHO (Ten.)

東京藝術大学音楽部声楽科卒業。同大学修士課程独唱専攻1年に在学。第67回全日本学生音楽コンクール声楽部門高校の部第2位。第68回同大会第1位、全国大会入選。サントリーホールオペラ・アカデミー プリマヴェーラ・コース第5期修了。これまでに声楽を川原敦子、櫻田亮の各氏に師事。



村山 惇朗 Atsuro MURAYAMA (Ten.)

埼玉県出身。明治大学法学部法律学科卒業後、社会人を経て東京藝術大学音楽学部声楽科入学。現在、同大学院音楽研究科声楽専攻在学中。小川裕二、川上洋司、吉田浩之の各氏に師事。



関口 直仁 Naohito SEKIGUCHI (Bar.)

岩手県出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。奏楽堂日本歌曲コンクール第 28 回歌唱部門入選。モーツァルト《フィガロの結婚(フィガロ)》《レクイエム》、ベートーヴェン《交響曲第 9 番》などのオペラや宗教曲、北区文化振興財団主催「芸大と遊ぼう in 北とぴあ」シリーズに出演。連続テレビ小説「エール」劇中歌ほか、多数のレコーディングに参加。村松玲子、三林輝夫、福島明也の各氏に師事。2012 年より株式会社クロスアートの経営に参画。甲斐清和高校非常勤講師。



吉永 研二 Kenji YOSHINAGA (Bar.)

熊本県天草市出身。大分県立芸術文化短期大学、同大学専攻科を首席で修了。東京藝術大学声楽科バス専攻を卒業し、武蔵野音楽大学大学院研究科博士前期課程修了。第 80 回読売新人演奏会出演。宗教曲からオペラコンテンポラリーダンスとの共演や環境保全の一環として演奏に赴くなど、活動は多岐にわたる。新所沢カルチャーセンター講師。

<https://twitter.com/kenjiYOSHINAGA>



原田 光 Hikaru HARADA (Bar.)

東京都出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。バッハ《口短調ミサ》、モーツァルト《戴冠ミサ》《レクイエム》、ハイドン《四季》《天地創造》、ブラームス《ドイツ・レクイエム》、デュリュフレ《レクイエム》等のソリストに出演。声楽を吉田浩之氏に師事。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻 2 年在学。



辻井 夏暉 Natsuki TSUJII (Bar.)

東京都出身。東京藝術大学卒業。卒業時アカンサス賞、同声会賞及び佐々木成子賞を受賞。現在、同大学院修士課程独唱科 1 年に在籍。これまでに声楽を松原陸、吉田浩之の各氏に師事。



松岡 あさひ Asahi MATSUOKA (Pf.)

幼少より音楽家の両親からピアノ・作曲を学ぶ。東京藝術大学音楽学部作曲科首席卒業。アカンサス音楽賞、同声会賞受賞。同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了。2011 年奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第 1 位。2012 年より文化庁新進芸術家海外研修員として、ドイツ・シュトゥットガルト音楽演劇大学に 2 年間留学し、作曲とオルガン演奏法を学ぶ。現在、東京藝術大学演奏芸術センター特任准教授。



筒井 紀貴 Noritaka TSUTSUI (Pf.)

早稲田大学政治経済学部卒業。ウィーン国立音楽大学ポストグラデュアル課程を経て、国際ロータリー財団奨学生及び文化庁新進芸術家海外派遣研修員として渡独。ドイツ国立トロッシンゲン音楽大学修士課程及びドイツ国家演奏家資格課程を修了、同演奏家資格を取得。帰国後、国立音楽大学大学院博士後期課程を修了、ヴィクトル・ウルマンの歌曲の研究で博士号を取得。現在、東京藝術大学演奏芸術センター教育研究助手、静岡大学教育学部非常勤講師。



横山 希 Nozomi YOKOYAMA (Pf.)

桐朋学園音楽学部演奏学科ピアノ専攻卒業。2017 年ミュンヘン国際音楽セミナー修了。ベルカントフェスティバル・イン・ジャパン 2020 Opera Studio をコレペティトゥーア受講生として、サントリーホール オペラ・アカデミー プリマヴェーラ・コース第 5 期をピアニスト受講生として修了。現在、第 6 期に在籍中。アンサンブルピアニストとして活動を広げている。流山少年少女合唱団及び東京ホワイトハンドコーラス練習ピアニスト、東京藝術大学音楽学部非常勤講師。

「I LOVE YOU」2021 プロジェクト・メンバー

橋本 久美子（音楽学部大学史史料室、申請代表者）

大石 泰（東京藝術大学名誉教授、企画・制作）

塚原 康子（東京藝術大学音楽学部教授、構成）

嘉村 哲郎（芸術情報センター助教、Web 発信）

仲辻 真帆（音楽学部大学史史料室教育研究助手、資料調査・執筆）

齋藤 百萌（音楽学部大学史史料室教育研究助手、資料調査・執筆・編集・展示・制作）

スタッフ

ステージマネージャー：小宮山 雄太（演奏芸術センター准教授）、**同助手**：田上 碧、丹野 理佐（演奏芸術センター教育研究助手）、**録音**：志野 文音（音響研究室教育研究助手）、森永 実季（音楽音響創造 修士1年） **録音補佐**：岩崎 真（音響研究室助教） **撮影・録画**：水本 紗恵子（演奏芸術センター教育研究助手） **展示構成・制作**：大学史史料室（橋本、仲辻、齋藤）、**展示補助**：増田 菜々（大学史史料室教育研究助手） **編曲**：松岡 あさひ（演奏芸術センター特任准教授） **楽譜浄書**：仲辻 真帆 **史料デジタル化・調査**：鄭 暁麗（音楽学 博士4年）
チラシ・プログラムデザイン編集：齋藤 百萌 **企画協力**：鎌田 紗弓 **英文コンテンツ**：コリーン・シュムコー

主催・企画・制作：東京藝術大学音楽学部大学史史料室

協力：東京藝術大学演奏芸術センター

Special Thanks・協力機関

大島 正規様、大島 妙子様、大角 欣矢様、岡田 晋輔様、柏木 成豪様、川崎 雅司様、川崎 雅哉様、菊池 武篤様、草川 郁様、草川 誠様、葛原 眞様、葛原 安子様、佐藤 明子様、鈴木 和美様、鈴木 伸章様、武富 文子様、中林 敦子様、信時 裕子様、東 紘一郎様、日高 純様、日高 三美子様、富士川 正美様、吉丸 昌昭様、吉川 道子様、新潟県立三条高等学校、福島県立郡山商業高等学校同窓会

東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクトとは

東京藝術大学が、芸術が持つ無限の可能性を社会に向けて伝え、実践によって示すために開始した、全学的なプロジェクトです。科学・医学・福祉等のあらゆる分野と繋がり、新たな価値を見出し、社会を豊かに変えていくことができる芸術の力を、学内公募によって採択された多種多様な企画によって、発信していきます。2020年には、50以上ものインスタレーションやコンサート、ワークショップなどを行い、その記録をアーカイブで紹介しています。



本企画は、SDGsの17の目標のうち10項目を、芸術面から実践しています。



編集・発行：2021年10月2日（土）
東京藝術大学音楽学部大学史史料室
<https://archives.geidai.ac.jp/>
※無断転載・複写・引用等を禁じます。